

森 壮也 編

## 『アフリカの「障害と開発」』

——SDGsに向けて——

研究双書 No. 六二二、アジア経済研究所、二〇一六年



二〇一五年NY国連本部での「国連持続可能な開発サミット」において持続可能な開発目標（SDGs）が同年以降の国際社会が共有する一七の

目標と一六九のターゲットとして採択された。大きな成果を挙げたとされるミレニアム開発目標（MDGs）に続くSDGsでは、障害が初めて、明示的に非差別の大事な項目として取り上げられた。同時に、最も脆弱な国々のなかのひとつとして、アフリカへの言及があった。開発途上国の開発パートナーとしての障害者についての研究である「障害と開発」分野では、従来、経済発展を遂げてきたアジアが主なフィールドであった。

本書は二〇一四〜一五年にアジア経済研究所で行われた「アフリカの『障害と開発』」研究会の最終成果である。アフリカでは、アジアでの知見から得られた処方箋はそのまま適用可能なのか、またそもそもアフリカ諸国の障害者が直面している現状はどのようなものであるのかということについての問題意識が同研究会では掘り下げられた。

本書は総論と各国別の章、そして最終章の三部からなる。総論の第一章（森壮也）では、先行研究を紹介しながらアフリカにおける「障害と開発」

のとらえ方の枠組みを提示する。アフリカの文脈での障害概念の再検討、国際協力と障害者政策、アフリカにおける貧困と障害者といった切り口などを紹介する。続く第二章は「障害に関するアフリカの地域的取り組み」（小林昌之）と題し「障害と開発」の地域内の試みであった「アフリカ障害者の一〇年」が直面した壁、現在の取組についての考察である。

次の章から各国別の分析が、東アフリカを皮切りに始められている。第三章はエチオピアを「開発主義体制下のエチオピアにおける保健政策とHIV陽性者・障害者のニーズ」（西真如）という題で取り上げた。同国は、国際開発における保健政策の成功事例として取り上げられる一方で、別の問題を抱えている。同国のHIV/AIDS陽性者と障害者に対する政策と状況を比較して、その現状の差をもたらした

原因について論じたものである。第四章は「ケニアにおける障害者の法的権利と当事者運動」（宮本律子）である。二〇一〇年のケニア新憲法は障害者の権利について論じている。しかし、国会においてケニア手話の公的認知が得られた一方で、ケニア手話の同国の国語としての実質的地位の確立に向けて、ろう教育の場での標準化、教科書作成、教師養成、シラバス等が未だ残された課題となっており、これが同章では指摘されている。

次が西アフリカである。第五章「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家——」（戸田美佳子）は、コンゴ民主共和国（旧ザイール）のキンシャサとコンゴ共和国のブラザヴィル、この二つの都市の間にあるコンゴ川の自律的な国境ビジネスに携わる障害者の事例分析を行っている。政府や当局による厳密なコントロールがなく、いわば緩い制度のなかで障害者たちの商才が発揮された興味深い事例である。第六章「セネガルにおける障害者の政策と生活——アフリカ障害者の一〇年——地域事務局と教育、運動労働——」（亀井伸孝）では西・中部・北アフリカ地域事務局が同国にある事情や障害児教育学校の現状、ろう者を中心に障害当事者団体の現状の概要について明らかにしている。国別の最後の章が第七章「南アフリカの障害者政策と障害者運動」（牧野久美子）で、

南アでは憲法で障害を明示的に取りあげて、差別を禁止し、アフアーマティブ・アクションを政策に取り入れている。また今後の方向として、黒人の経済力強化法（BEE法）制度と障害者手当制度の関わりから同国の特徴も分析されている。

終章となる第八章「終章——アフリカの障害と開発から学べるもの——」（森壮也）では、SDGsを見据えながら、これからの開発における諸課題は、アフリカの障害者を念頭に置くことどのような方向を目指すべきかを論じる。アジアでは、「障害と開発」の研究成果から、障害インクルーシブな開発のために、①障害の社会モデル、②貧困削減（MDGs、ポストMDGs、国連障害者の権利条約）③障害当事者コミュニティの三つがポイントとされていたが、本書では、アフリカでの考察から、さらに国家との関係やHIV/AIDS政策も考慮に入れないと、SDGsの達成は難しいことも課題として浮き彫りにしている。開発関係者、国際協力関係者、そして研究者により広い視点を持っていただくために本書が貢献できるものはグローバルな意味で大きい。SDGs以降の国際開発の考察をさらに深めるためにも、ぜひ一読いただきたい。

（もり そつや／アジア経済研究所 開発研究センター 主任調査研究員）